
誰にも言えない秘密が秘密じゃなくなった日

MISA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰にも言えない秘密が秘密じゃなくなった日

【Nコード】

N2383M

【作者名】

MISA

【あらすじ】

両親をなくした私はふとあることを思い出した。

昔遣っていたブログのコトを。

それから始まる携帯小説を書き続ける日々。

そして誰にも言わない秘密が公になる日が近づいていた。

誰にでも秘密の一つや二つはあるもんだ。

私、まえかわきの前川紀にだって。

高校に入る前のことだった。両親がこの世から去ったのを期に、携帯小説を書き始めた。両親が死んだのはとても悲しかったし、なぜなくなってしまったのかと二人を恨んだこともある。しかし、その悲しさを親戚の少ない紀は誰にも打ち明けることはできなかった。ただ、途方にくれ、引き取ると言ってくれているあまり知らない伯父さん一家の話を外面の笑顔で丁寧^{ていねい}に断った。それからだった。

二人を探すかのように居間に居つくようになったのは。幸い春休みで学校にも行かなくてもいい時期だったのが彼女の手を休めないきっかけになってしまった。

あるとき、一時期だけ自分のブログをしていたことを思い出した。飽きてしまっ^てからは、全然やっていなかったその存在を思い出し何故か無性にやりたくな^った。

パソコンをつけ、暗い空間にいきなり、かなり明るい光が灯った。

昔の記憶を探り、IDと、パスワードを入力するとすんなり自分のページに入ることができた。

懐かしさに捕らわれいるんなところをまわった。

そこで見つけたのが携帯小説を投稿できるサイトだった。

最初は、興味だけだった。
どんなものなのか、ただ楽しそうだから。

自分に文才などというものが備わっているのかさえ考えずにそのサ
イトに登録した。

その日から私は小さな小説家になったのだった。

書く内容は自分と同じ境遇の女の子を主人公にした、恋愛物と決め
た。

物語の最初は女の子を助けるのがいいな。

男の子は見た目不良だけど、実は優しいのがいいかもしれない。し
かも、虫が嫌い。

どんどん頭に流れてくるイメージと、アイデアを紀は流れ作業のよ
うに文章にしていた。

ろくに書き方も知らないし、本だって国語の学習教材でしか読まな
いようなものがいきなりやる気になって勢い良く小説を書き始めた。

それは思いの外大成功になる。

ある会社から、「うちの会社から、本を出しませんか？」とお誘
いを受けた。

親がない紀はひとまず話を聞くことにした。

詳しい話を聞くかぎりでは、何をしても紀には悪いことがないと分
かった。

しかも売れたお金の約3分の1をくれるという。

おごずかい稼ぎくらいにしか思っていなかった紀はその申し出を引き受けることにした。

出版にあたって、書き直すところがたくさんあることに気が付いた。書き方なんて知らなかったものだから適当だし、書き方がちがうと、何度も注意されてしまった。しかし、やめようとは思わなかった。

この小説が形になるとき、私の何かが変わると信じていたから。

事実、何かがすでに変わっていた。閲覧者の人数なんて見たことがなかった。お気に入り登録してあるページは自分専用ページだし、自己満足だから。

出版してみて初めて分かった。

どこにでもあるようなありきたりな話を求めていた人がいたことを。

飛ぶように売れるというのはこういうことなんだろう。

学校でも、もっている人を見かけたことが何度もあった。たまらず意見を聞いてみたこともある。

もちろん自分がかいたなんていわないけど。

「その本って面白いの？」

「うん。めっちゃくちゃおもしろいよ。なんかね、リアルなんだよ。だから人気なんだと思うよ」

「あんだそれ、今日の朝テレビでやってたやつそのままじゃん」
「ばれた？」

ありがとうとその場を立ち去った。

これは喜びなのだろうか？

よく分からないが、心の底からわきあがる何かに体を振るわせた。
だれも知らない私の秘密。

放課後の教室で私は携帯を開いた。

新しい小説を書いてくれと頼まれたから。

あの子がいつていた「リアルさ」がでるように自分の体験から書く
ことに決めた。

次はちゃんとしたものを書こうと思った。

いっすすごくファンタジーにしてやるうとおもったがどうしたらいい
のかよく分からなかった。

書き出しはこうだ。

あなたはどんな出会いを求めますか？

書き出しを決めたのはいいものの、次が思い浮かばなかった。

なぜかやる気が出ないのだ。

「何してんの？」

後ろから聞こえてきた同じクラスの男友達の声に慌てて携帯を閉じ
る。

「何？彼氏でも出来た？」

「違うよ。ビックリしただけ」

「あのさ、俺、なんとなくだけどさ、あの携帯小説お前の境遇に似てるよなって思ったんだけど」

この男は昔から鋭い所があった。

しかし今、コイツが言っているのは仮説であり確信ごとではない。それを心にいい聞かせて平静を装いながら顔に出さないように答える。

「そうなの？携帯小説なんて読んだことはないからよくわかんない」

書いたことはあるけど。

そんなことはいわないけれど。

「そっか、そうだよな。お前が読書とかガラじゃないよな」

「ひどいこといってるけど、ま、そうだから何も言いません」

「じゃあな」

「ばいばい」

誰にも言えない秘密。

携帯小説が大ブレイクしたのはそのすぐあとだ。

学校では女子も男子も関係なく携帯小説を読んでいる人が増えた。しまいには続きが気になるという授業中も携帯を開いて読む人が出てきたため、全校集会が開かれた。

「このような携帯諸説を読むのは悪いことだとは言いませんが、少し考えてください。授業中にまで読むようなものではありません。」
結局は否定しかしない。

例に出されたのが自分の携帯小説であることにかかなりの憤りを覚えた。

罵倒しかできず、子供に制限を掛けることしかできない大人が何を言っているのだろうか？

と本気で思った。

これがまた新しい小説を書き始める機会になってしまった。

高校3年生になったばかりの紀には何が何だかわからないまま時間が過ぎていった。

「教室でこの小説を読むのを禁止しようとおもう」

担任が出してきたのは、紀が書いた新しい小説だった。

自分らしさを最大限にいかし、ひたすら先生を嫌っている生徒のお話だ。

高校生らしい言葉と字面だが、結構な好評だった。

「これもお前達と同じ高校生が書いているらしいが、教育委員会が……」

担任はとても申し訳なさそうだ。

そんなことはどうでもいいのだが。

どうせ紀は進学先が決まっているし、すでに学校なんてこなくてもいい時期だったこともあって、

打ち明けること。

「そんなこと、よく作者の前で言えますね」

クラスの全員の視線がすべて私に集まる。

「その本の作者は私なんです。罵倒とか好きなようにしてもいいですけど、私がない所ですてほしかった」

紀は無理なことを言っていることに気が付いていた。

誰が想像する？

今まで読んでいた本の作者が近くにいたなんて。

誰が想像する？

紀はカバンを掴んで教室を出た。
新しいアイデアが浮かんだから。

(後書き)

読んでいただき有り難うございました。

このの最後はもっとガンガンいきたかったのですが、自分才文才ではわざとらしくなりましたよね・・・。

申し訳ない。

感想やレビューは大歓迎です。

よかったらアドバイスお願いします。

基本書き直す気はありませんが(ありのままの分で見てもらいたいと思っていますので)、次の作品のステップにしたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2383m/>

誰にも言えない秘密が秘密じゃなくなった日

2010年12月18日14時11分発行